

新秩父宮ラグビー場（仮称） 基本計画

令和3年6月

日本スポーツ振興センター

目次

第1章 基本計画策定の目的

1.1 はじめに	1
1.2 これまでの経緯	1
1.3 整備の必要性	4
1.4 基本方針	5

第2章 計画地の概要

2.1 計画地の現状	6
2.2 計画地を含む都市計画	7
2.3 都市計画の実現による計画地及び周辺環境の整備	8
2.4 計画地を含む神宮外苑地区再開発事業の整備イメージ	9

第3章 施設整備計画に関する事項

3.1 施設整備の基本的な考え方	10
3.2 整備方針	11
3.3 事業方式	13

第4章 管理・運營業務に関する事項

4.1 管理・運営の基本的な考え方	14
4.2 収支に関する基本的な考え方	14

第5章 事業スケジュール

	16
--	----

第1章 基本計画策定の目的

1.1 はじめに

本基本計画は、秩父宮ラグビー場を神宮外苑地区の再開発事業により建て替えるにあたり、これまでの経緯、整備の必要性、基本方針（ビジョン・コンセプト）等を踏まえ、新秩父宮ラグビー場（仮称）の施設整備計画及び管理・運営等についてとりまとめたものである。

1.2 これまでの経緯

秩父宮ラグビー場を管理・運営する日本スポーツ振興センター（以下「JSC」という。）は、新秩父宮ラグビー場（仮称）の整備について、東京都（以下「都」という。）の地区計画や指針に基づき、神宮外苑地区一帯のまちづくり事業として、都及び神宮外苑地区のまちづくり事業を推進する関係権利者と連携し協議を重ねてきた。

また、スポーツ庁をはじめとする関係省庁や、公益財団法人日本ラグビーフットボール協会（以下「JRFU」という。）など関係者との意見交換やヒアリングを通して、本基本計画の検討を進めてきたところである。

これらの検討経緯の詳細は、以下のとおりである。

(1) 神宮外苑地区まちづくり事業検討経緯

平成 25（2013）年 6 月、都は「神宮外苑地区地区計画」を決定し、神宮外苑地区内の緑豊かな風格ある都市景観を保全しつつ、スポーツクラスターと魅力ある複合市街地を実現することを目標に、既存スポーツ施設で現在行われている競技等の継続に配慮しながら、関係者が相互に連携・協力してまちづくりを進めていくこととした。同年 9 月には、2020 年のオリンピック・パラリンピック競技大会の東京開催が決定し、神宮外苑地区では大会に向けて国立競技場の整備が進められた。

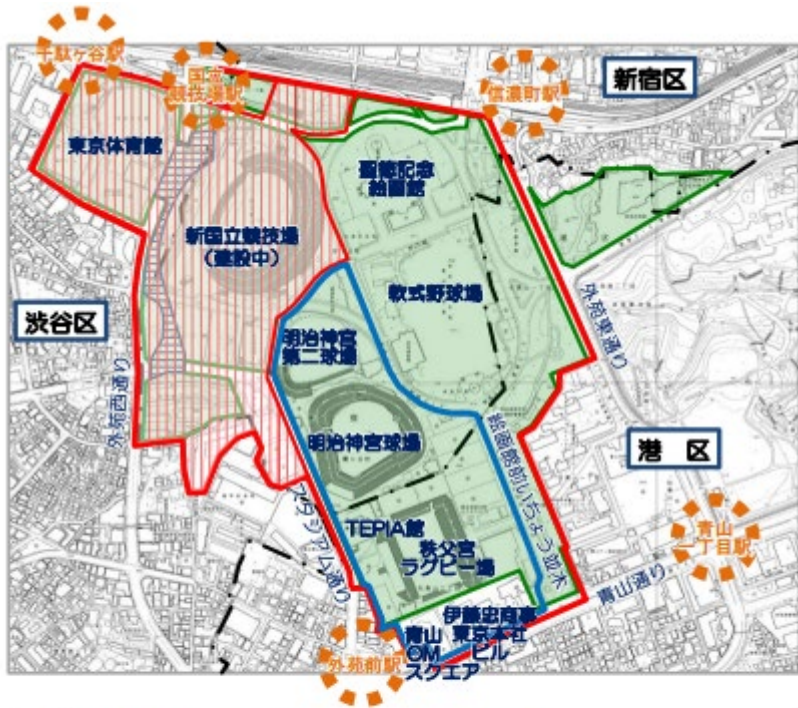
平成 27（2015）年 4 月、JSC 及び関係権利者と都は上記、地区計画の実現を目標に「神宮外苑地区まちづくりに係る基本覚書」を締結し、相互に連携・協力しまちづくりを進めることとした。

平成 28（2016）年 7 月、JSC 及び関係権利者と都は既存スポーツ施設で現在行われている競技等の継続に配慮しながらまちづくりを進めるため「神宮外苑地区（b 区域）まちづくり基本計画の検討に関する合意書」を締結し、上記の目標に加え、相互に連携・協力して「神宮外苑地区（b 区域）まちづくり基本計画」の策定等に取り組むこととした。

平成 30 (2018) 年 3 月、JSC 及び関係権利者と都は「神宮外苑地区まちづくりに係る基本覚書」と同様の内容を目標に「神宮外苑地区 (b 区域) まちづくりの検討に係る今後の取組等に関する確認書」を取り交わし、神宮外苑地区 (b 区域) の再整備を検討するための取組等を確認した。

これらを踏まえ、同年 4 月、都は「東京 2020 大会後の神宮外苑地区のまちづくり検討会」を設置し、まちづくりの目標や誘導方針、競技等の継続に配慮した大規模スポーツ施設の連鎖的な建替え等スポーツ環境に関する方針、公園まちづくり制度の活用要件等について検討を進め、同年 11 月に「東京 2020 大会後の神宮外苑地区のまちづくり指針」を策定した。

一方、JSC 及び関係権利者は都の地区計画や指針を基に、公園まちづくり制度を活用することを前提に、神宮外苑地区一帯の新たな 100 年に向け、誰もが気軽に訪れ楽しむことができる公園の再編と広域避難場所としての防災性を高める複合型の公園まちづくりを目指し、検討を進めてきた。



凡例		神宮外苑地区地区計画の区域		都市計画公園明治公園の区域
		うち地区整備計画策定済みの区域		うち立体的な範囲の区域
		b区域		区界



出典：東京 2020 大会後の神宮外苑地区のまちづくり指針（平成 30 年 11 月）

(2) 新秩父宮ラグビー場（仮称）整備等事業の検討経緯

JSC は都が地区計画や指針で掲げている、世界に誇れるスポーツクラスターの形成の実現に資することを前提に新秩父宮ラグビー場（仮称）の整備計画を検討し、平成 30（2018）年 12 月、「ラグビー場の整備に関する基本的な考え方」を策定した。この基本的な考え方では、ラグビー場の歴史的背景を踏まえ、「秩父宮」の名称はそのまま引き継ぎ、また、ラグビーの「聖地」としてのレガシーを次世代に引き継ぐため、JRFU など施設利用者のニーズを十分踏まえながらラグビー専用スタジアムとして整備しつつ、他の用途でも利用可能な施設として整備計画を検討することとした。

その後、令和 2（2020）年 9 月、「ラグビーの振興に関する関係者会議（第 2 回）」（主管：スポーツ庁）において JRFU より秩父宮ラグビー場の整備について、全天候型のラグビー専用スタジアムとするなどの要望があった。

この JRFU の要望を受け、令和 3（2021）年 1 月、「ラグビーの振興に関する関係者会議（第 3 回）」において『秩父宮ラグビー場の移転整備の基本的考え方』が示され、全天候型のラグビー場として計画することや事業方式としては PFI 事業により整備する方針などが示された。

これらの基本的考え方を踏まえ、さらに JSC において検討を進め、本基本計画を策定した。

1.3 整備の必要性

(1) 秩父宮ラグビー場の歴史的経緯と施設の老朽化

秩父宮ラグビー場は戦後間もなくラグビー関係者の熱意により昭和 22（1947）年に「東京ラグビー場」として建設され、昭和 28（1953）年に逝去された秩父宮雍仁親王殿下の本ラグビー場の建設をはじめとする我が国のラグビーの発展へのご遺徳を偲び、同年「秩父宮ラグビー場」に改称された。その後、昭和 37（1962）年に国有施設となり、昭和 39（1964）年には東京オリンピック開催のためスタンド内部改装及び一部屋根新設工事が、昭和 46（1971）年にはグラウンドの改修工事が行われ、昭和 51（1976）年にはメインスタンドが竣工している。その後も、スタンドの改修や付帯設備の整備などが重ねられてきたが、令和 4（2022）年で築 75 年を迎える秩父宮ラグビー場は施設全般の老朽化が著しく、経年による劣化や耐震補強への対応が大きな課題となっている。

(2) 社会環境の変化、多様化するニーズへの対応不足

今日までにバリアフリー工事、車いす席やトイレの増設、授乳室の設置など誰もが使いやすい施設となるよう改修工事を行ってきたところだが、ユニバーサルデザインの導入や多様化するニーズへの対応が求められている。

以上の状況から、秩父宮ラグビー場を整備する必要があると考える。

1.4 基本方針

新秩父宮ラグビー場(仮称)については、「「スポーツの力」で未来を育てるスタジアム」というビジョンの下、4つのコンセプトの実現を図ることを基本方針として、以下のとおり定める。

ビジョン

「スポーツの力」で未来を育てるスタジアム

～人々の生きがいを創出し、持続可能で活力ある社会を育む～

コンセプト

1. 我が国のラグビーを象徴するスタジアム

ラグビーの「聖地」として親しまれてきた秩父宮ラグビー場の歴史を次世代に継承し、これからもラグビーを愛するすべての人と共に歩み続け、ラグビーをプレーする人、みる人、ささえる人にとって快適な施設として、ラグビーの魅力を引き出すことができるスタジアムを目指す。

2. 様々なシーンに対応できる誰もが心地よいスタジアム

ラグビーの試合がない日でも他のスポーツ競技や各種イベントなど様々な用途に対応が可能で、主催者にとって機能的であり、且つユニバーサルデザインに配慮するなど共生社会にふさわしい計画とし、誰もが使いやすい施設とする。また、神宮外苑地区のスポーツクラスターの形成やにぎわいの創出に寄与し、人々が集い、交流が生まれ、何度でも訪れたいような都市型の新しいスタジアムを目指す。

3. 持続可能性に配慮した未来を紡ぐスタジアム

環境負荷の低減、リサイクルの推進など、施設のライフサイクルを通して持続可能性に配慮した取組を積極的に推進し、時代の変化に対応しながら社会や地域に貢献する未来志向のスタジアムを目指す。

4. スポーツの多様な価値を発信するスタジアム

文化交流施設としてスポーツミュージアムをスタジアム内に設置するなど、スポーツに関する深い学びを支援し、知的な刺激や楽しみを分かち合う機会を提供する。また、心身の健康の保持増進に加え、スポーツ・インテグリティや国際交流による相互理解の推進などスポーツを通して得られる多様な価値を広く国民に発信し、スタジアムに足を運ぶことで「スポーツの力」、スポーツの可能性を感じることができるスタジアムを目指す。

第2章 計画地の概要

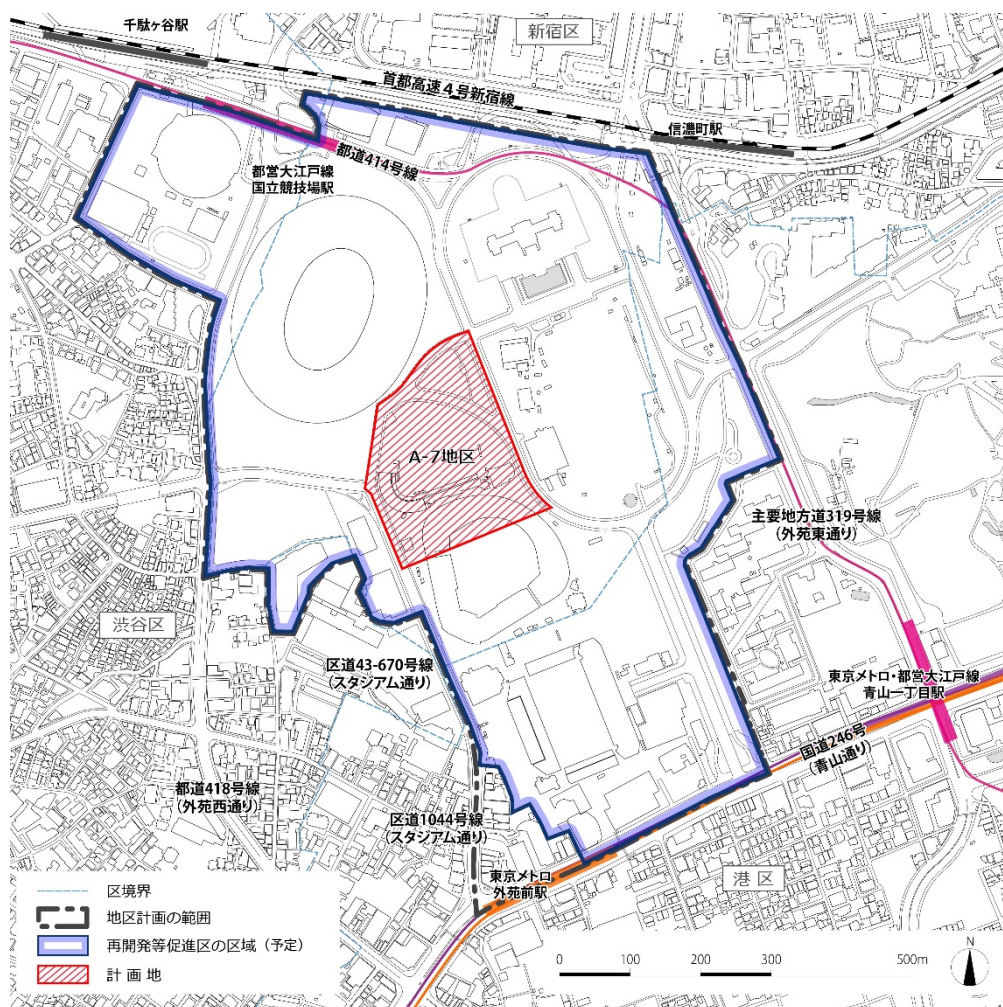
2.1 計画地の現状

新秩父宮ラグビー場（仮称）の計画地（神宮外苑再開発事業では「A-7地区」という。）は、新宿区に位置し国立競技場に隣接している。地区の面積は約 5.13ha、敷地面積は約 43,500 m²である。

計画地へのアクセスは、最寄り駅は都営大江戸線国立競技場駅となるが、JR千駄ヶ谷駅、信濃町駅、東京メトロ銀座線外苑前駅、半蔵門線青山一丁目駅からも徒歩圏内にあり、交通利便性の高い立地である。

計画地の北側には落葉広葉樹エリアがあり、緑豊かで風格ある日本の四季の彩りを感じることができる。

また、計画地を含む神宮外苑地区は、国立競技場をはじめとした日本を代表するスポーツ施設やその関連施設が多く集積し、国民がスポーツに親しむ一大拠点を形成している。



2.2 計画地を含む都市計画

計画地を含む神宮外苑地区は、都が策定した「神宮外苑地区地区計画」(平成 25 年 6 月)の地区整備エリアである。この地区計画では地区内のスポーツ施設等の建替えを促進し、国内外から多くの人を訪れる世界的競技大会の開催が可能となるスポーツ拠点を創造し、緑豊かな風格ある景観の創出、バリアフリー化された歩行者空間の整備など、成熟した都市・東京の新しい魅力となるまちづくりの推進を目標に掲げている。

また、都は上記、地区計画に定める目標の実現に向けて、東京 2020 大会後を見据え、民間が事業主体となって進めるまちづくりを適切に誘導するため「東京 2020 大会後の神宮外苑地区のまちづくり指針」(平成 30 年 11 月)を策定し、神宮外苑地区をにぎわい溢れるみどり豊かなスポーツの拠点として更に発展させていくための目指すべき将来像を掲げた。

新秩父宮ラグビー場(仮称)は、都の公園まちづくり制度の活用も図りながら、上記、指針に基づき、世界に誇れるスポーツクラスターの形成の一助となるようまちづくりに取り組む方針で整備を行う。また、整備を行うにあたり、地区計画の方針を踏まえた地区施設等を位置付けていく。

2.3 都市計画の実現による計画地及び周辺環境の整備

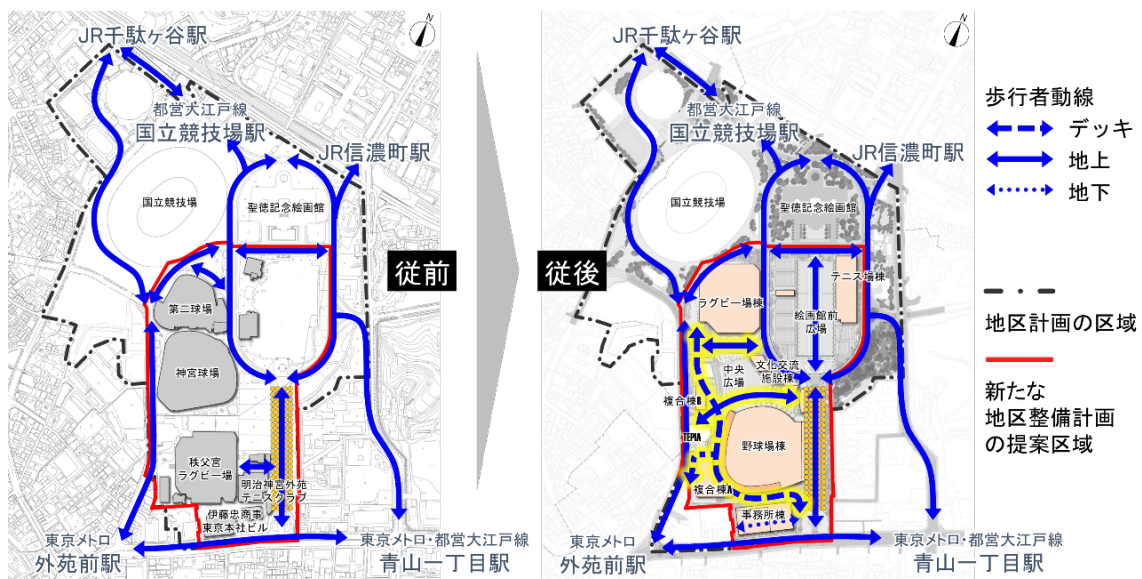
計画地は上記、都市計画の実現により、「スポーツクラスター」の主要施設として、ラグビーの「聖地」として親しまれてきた秩父宮ラグビー場の歴史を継承しつつ、老朽化した施設の建替えを通じた利用促進を図る。あわせて、隣接する国立競技場や中央広場、神宮球場との連携を図り、地域一帯でスポーツ・文化の醸成に貢献する。

また、計画地への来場者が安全・快適に歩行・滞留でき、また、周辺の緑豊かな風格ある都市景観やにぎわいを楽しめるよう歩行者動線等の整備を図る。

具体的には、廃道となる計画地北側の新宿区道部分を緑道（地区施設）とすることで国立競技場との間に緑豊かな歩行者空間を整備し、西側のスタジアム通りと都道 414 号を結ぶ東西の歩行者ネットワークを形成する。

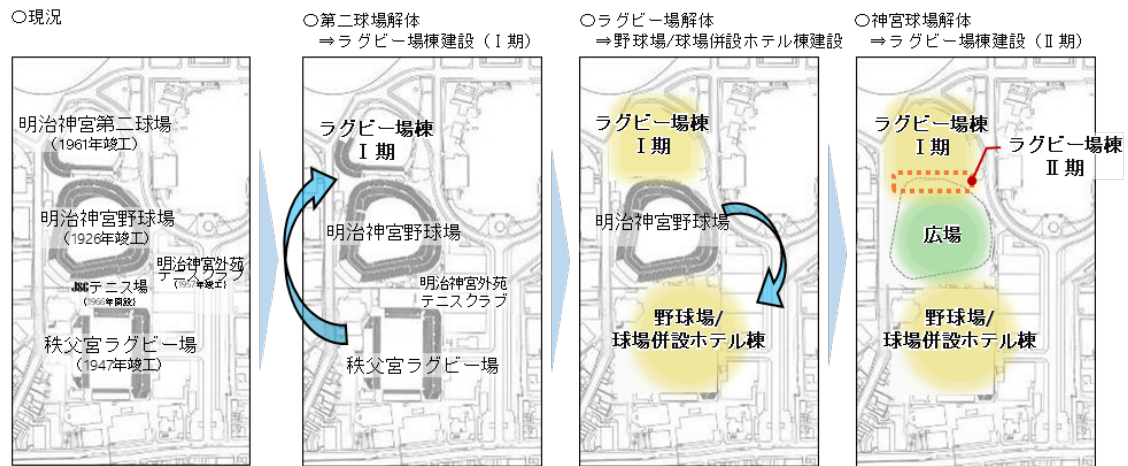
また、上記の廃道に伴って付け替える区道を計画地南側に整備することにより、神宮外苑再開発エリアに不足する東西のネットワークの拡充を図る。

その他、南西部に南北デッキを設け、外苑駅から計画地及び国立競技場等への歩行者の安全と快適な移動を実現するネットワークを形成する。



2.4 計画地を含む神宮外苑地区再開発事業の整備イメージ

計画地を含む神宮外苑地区一帯のまちづくり事業は、都の指針の誘導方針として示されている「競技等の継続に配慮した大規模スポーツ施設の連鎖的な建替え」に基づき整備を行う予定である。新秩父宮ラグビー場（仮称）については、現位置より北側に移転し、I期、II期に分けて整備する予定で検討を進めている。



※ラグビー場棟の南側は神宮球場にかかるとためII期に建設

第3章 施設整備計画に関する事項

3.1 施設整備の基本的な考え方

新秩父宮ラグビー場（仮称）の整備は都市再開発法に基づく第一種市街地再開発事業（個人施行）として施行予定である。また、基本方針（第1章1.4）を踏まえ、以下の考え方を基に施設整備計画を検討する。

1. 我が国のラグビーを象徴するスタジアム

■ラグビーの「聖地」

選手は最高の高揚感を感じ、観客はどこからでも見やすく、スタッフは機能的に運営できる、訪れた人々が一体感：ONE TEAMになれるラグビー場を目指す。

■ラグビーの魅力を感じられるスタジアム

秩父宮ラグビー場の歴史や日本ラグビーの感動の場面、記録などに加え、ラグビーの持つ多様な価値を実感し、誰もがスタジアム全体でラグビーを体験できるような施設を目指す。

2. 様々なシーンに対応できる誰もが心地よいスタジアム

■多様なスポーツ・文化によるにぎわい創出

ラグビー以外のスポーツ競技や各種イベントでも使いやすい施設とし、神宮外苑地区のにぎわい創出に寄与する。

■人にやさしく、何度でも訪れたい空間

共生社会にふさわしい計画とし、誰もが心地よく過ごすことができる施設を目指す。

■スマートスタジアム

最新の通信環境を導入するなど、ICTの活用による高付加価値のサービスを提供する。

「スポーツの力」で未来を育てるスタジアム ～人々の生きがいを創出し、持続可能で活力ある社会を育む～

3. 持続可能性に配慮した未来を紡ぐスタジアム

■地球・社会にやさしい施設

省エネルギーをはじめとする地球温暖化対策、持続可能性に配慮するなど、地球や社会にとってやさしい施設を目指す。

■防災性の強化により地域に貢献

大規模災害発生時には利用者や帰宅困難者の安全を確保するとともに、防災拠点として地域に貢献し、安心・安全な施設を目指す。

4. スポーツの多様な価値を発信するスタジアム

■「スポーツの力」で未来を育てる

秩父宮記念スポーツ博物館を起点として、様々なスポーツの価値を発信し、知的な刺激や楽しみを分かち合い、語り合える場・機会を提供する。

■スポーツのもたらす可能性

心身の健康の保持増進に加え、スポーツが社会にもたらす効果、人と人とのつながり・絆などスポーツの可能性を感じられる施設を目指す。

3.2 整備方針

1 基本事項

(1) 規模・主用途

- ・ワールドラグビー公式試合開催の際に求められる施設水準と機能*を想定する。
※「ラグビーワールドカップ 2019 開催都市ガイドライン」で示される試合カテゴリーのプール戦（カテゴリーB）クラス
- ・収容人数は約 25,000 人規模とし、座席は 20,000 席を想定する。
- ・主用途はラグビー利用とするが、他のスポーツやスポーツ以外のイベント等の利用も想定する。
- ・全天候型のスタジアムとする。

(2) 一般利用者への開放

- ・スポーツやイベント利用以外にも、公園利用者や来街者に対しても開放された施設を目指し、スポーツ博物館、飲食店、物販施設等、利用できる施設を計画する。

(3) スマートスタジアム

- ・IT 技術の進展により、観客に対する様々な情報提供や観客による情報発信等が高度化・多様化していくことを前提に、最新の通信環境の導入等を検討する。

(4) ユニバーサルデザイン

- ・誰もが利用しやすい施設とするため、ユニバーサルデザインに十分配慮した諸室、動線、サイン等を計画する。

2 導入機能

(1) フィールド

- ・人工芝のフィールドとし、フィールドサイズは 140m×87m を想定する。人工芝はトップレベルの選手が常に良好な状態で競技できる環境を整える。
- ・選手との距離が近く感じられ、試合の臨場感が感じられ、選手と観客の一体感が生まれるラグビー場を目指す。

(2) スポーツ関連（選手関連、運営者等関連、メディア関連）

- ・選手関連諸室、運営者等関連諸室、メディア関連諸室などは、ラグビーの試合の開催に必要な諸室を確保する。
- ・選手関連諸室、運営者等関連諸室、メディア関連諸室を利用する者が不自由なく快適に利用できる計画とする。

(3) 観客関連

- ・観客が快適な環境でスポーツ観戦できるように、スタンド席やコンコース等の空間を計画とする。文化イベント利用にも配慮した形態とする。
- ・案内サインやゲート等の設えも視認性に配慮し、誰もが使いやすいラグビー場とする。
- ・入場前の待機スペースを確保する。

(4) VIP 関連

- ・十分な数の個室化された VIP ルーム等、ホスピタリティ施設としてふさわしい空間を計画する。

(5) 文化交流施設

- ・スポーツの多様な価値を伝えるネットワークの拠点としての秩父宮記念スポーツ博物館及びラグビーの魅力を発信するミュージアムを計画する。

(6) イベント関連

- ・イベント関係者の諸室は、イベントの開催に必要な設備・諸室を適切に確保し、運営者が不自由なく快適に利用できる計画とする。
- ・搬入車両のフィールド乗り入れ等の設営に配慮した計画をする。

(7) にぎわい形成機能

- ・イベントの有無に関わらず来街者が利用できるように、ラグビー場低層部に文化交流施設、店舗等を配置し、屋外空間や他の街区との連携による一体的なにぎわい形成に配慮した計画とする。

3 動線計画

- ・ラグビーを主とした国際競技大会の開催に対応できるように、選手、運営者、メディア関係者、観客、VIP、管理者等の施設利用者がそれぞれ機能的で分かりやすい動線を計画する。
- ・自然災害や火災発生時等に、施設利用者が迅速かつ安全に避難できる動線を確保する。

4 景観

(1) 外観デザイン

- ・ラグビーの「聖地」としてふさわしい品格のあるデザインを目指す。
- ・神宮外苑の緑豊かな風格ある都市景観との調和を図る。また、隣接する国立競技場や野球場棟など、三つのスタジアムが協調し、周辺街区や公共施設等との調和を意識したデザインを目指す。
- ・スタジアム通りからの圧迫感の緩和を図るとともに、中央広場・絵画館前広場からの景観に配慮する。

(2) 緑化計画

- ・計画地の外周や北側に存在する既存樹木を活かし、神宮外苑の緑と調和した緑化空間を形成する。
- ・隣接する国立競技場と調和するみどりのネットワークを形成する。

5 環境

(1) 環境

- ・自然エネルギー等の利活用により省エネルギー化・節水を図り、環境負荷を軽減した施設とする。

(2) LCC（ライフサイクルコスト）

- ・環境配慮した設備機器を採用するなど、LCCが低減されるように計画する。

6 設備

- ・スポーツ利用やイベント利用それぞれに対応し、観客や管理運営者等にとって魅力的で使いやすい設備・設備諸室を計画する。
- ・将来の設備更新に配慮した計画とする。
- ・自然災害や火災発生時等においても対応可能な設備計画とする。

7 防災・BCP

- ・大規模災害に備え、十分な耐震性を有する構造とするとともに、防災にも配慮した安心安全な計画とする。
- ・自然災害等に対応するために、必要な構造や防災機能を有する計画とする。
- ・災害発生時に帰宅困難者対応や施設利用者へ配慮して、滞在可能なスペース、備蓄倉庫、発電設備等を計画する。
- ・来場者が安心して過ごせるよう、新型コロナウイルス感染症等の感染症への対応を踏まえた計画とする。

3.3 事業方式

民間のノウハウと創意工夫を最大限活用できるよう施設整備及び運営に民間活力を活用した事業方式（PFI事業／BT＋コンセッション方式）により整備することを前提に進める。

第4章 管理・運營業務に関する事項

4.1 管理・運営の基本的な考え方

1 管理・運営の基本的な考え方

新秩父宮ラグビー場（仮称）については、基本方針（第1章1.4）に掲げるスタジアム像の実現を図り、ラグビーをプレーする人、みる人、ささえる人、集まる人にとって安全かつ快適な施設となるとともに、他のスポーツ競技や各種イベントなど様々な用途でも同様に誰もが安全かつ快適に使用できるよう管理・運営を行うことを基本とする。

2 管理・運営手法

新秩父宮ラグビー場（仮称）の管理・運営については、上記の基本的な考え方に則った管理・運営を実現し、ホスピタリティ機能の充実や収益の最大化を図るため、民間のノウハウと創意工夫を最大限活用できるようコンセッション方式を想定している。また、民間活力が最大限に発揮されるよう、設計・建築と管理・運営とを連続した一体事業とすることを想定している。

3 対象施設範囲

管理・運営の対象施設範囲は、新秩父宮ラグビー場（仮称）とする。

ただし、そのうち、文化交流施設として新秩父宮ラグビー場（仮称）に付帯して整備するスポーツ博物館については、資料の収集保存や調査研究、展示、教育普及等の学芸業務をはじめとする運營業務は原則として JSC が行うこととし、同博物館の維持管理業務は新秩父宮ラグビー場（仮称）の維持管理と一体で事業者が行うことを想定している。

なお、神宮外苑地区一帯のまちづくりに取り組むため、周辺地区関係者との連携及び協力を努めるものとする。

4 運営権設定と管理・運営の開始時期等

I 期 建設工事竣工後に運営権を設定し、管理・運営を開始することを想定している。

4.2 収支に関する基本的な考え方

1 収入

新秩父宮ラグビー場（仮称）の収入については、ラグビーその他スポーツ利用による貸館収入のほか、文化イベント利用等による貸館収入、広告収入、ホスピタリティの向上に資するサービスの提供による収入等を想定する。

事業者は、新秩父宮ラグビー場（仮称）の全天候型スタジアム等の施設特性や立地の

優位性を最大限に活かし、収益の最大化を図ることが期待される。

2 費用負担

新秩父宮ラグビー場（仮称）の維持管理・運営に係る費用（運営実態に基づき課税があった場合の課税額相当分の負担を含む。）は、貸館その他の収入から事業者が原則負担することを想定する。

収入及び費用負担については、今後実施するマーケットサウンディングの調査結果及び市場動向を踏まえ、更に詳細な検討を行う。

第5章 事業スケジュール

事業スケジュールは下記のとおりを想定している。

- ・令和4（2022）年度～ : 基本・実施設計
- ・令和6（2024）年度～令和9（2027）年度 : I期 建設工事
- ・令和15（2033）年度～ : II期 建設工事